

教育の質

三森ゆりか

息子が英国の大学に進学した友人からメールが入った。友人はスペイン人で、スペインの教育システムの中で育った。息子の父親は日本人で、息子は小学校半ばまでスペインの現地校で、それ以後は日本の教育システムの中で勉強している。彼は大学に入ったとたん、日本の教育との質の違いに面食らった。彼の出身高校は、高い進学率を誇る進学校である。高校一年生から英国で寮生活を送った彼は、毎日夜中までの勉強を義務づけられていたそうである。それなのにそこで勉強したことが英国の大学ではあまり役に立たなかった。例えば歴史。日本の高校では暗記さえすれば高得点が取れた。ところが英国の大学で必要なのは、ある事件について自分がどう考えるか、それが社会に与えた影響は何か、もし発生しなかったらなら社会はどのようなようになっていたか……等々、歴史上に起こった現象について多角的な方面から検討し批判する能力であって、記憶力ではなかった。かくして彼

は歴史を一から勉強し直すことになったという。

私は彼とは逆の経験をした。私がドイツに行ったのは中学二年生の時だった。四年間ドイツの現地校に通ったが、私はずっと劣等生だった。宿題も試験もすべて論文形式だった学校で、私の書いたものは全く評価されない。私は当時それがつたないドイツ語のせいだと思いつみ、諦めていた。しかし納得できなかったのは、他の国々から来た外国人たちが私と同程度のドイツ語力で書いたものの評価がなぜか常に私のものより高いことだった。宿題や試験で求められていたのは、常に明確な根拠に基づく自分自身の考えだった。教科や授業のまとめは論外だった。単なる感想も問題外だった。そのことに私

が気がついたのは帰国も間近になってからだった。私は帰国後一年数か月で日本の大学を受験した。不遜ながら受験勉強は非常に楽だった。なぜかと言えば、暗記するだけで考える必要がなかったからである。ドイツの学校では、暗記はさほど重要視されていなかった。歴史などは資料の持ち込みが許されていたからである。ところが、試験はとてつもなく大変だった。課題について

分析し、自分の見解を提示し、更にはこれを論証しなければならなかったからである。

価である。

一二年生の歴史の試験の課題を私は今でもよく覚えている。その一年間は、ナチスドイツの学習に当てられていた。「ナチス・ドキュメント」という記録書が教科書代わりで、教師と生徒が真剣に論じ合いながら授業は進められた。授業の目的は、二度と過ちを繰り返さないために、戦争を知らない若い世代に第二次世界大戦におけるナチスドイツの責任を明確に認識させることだったであろう。この時の試験課題の一つが、「独ソ不可侵条約がドイツにもたらしたメリットとデメリットを論証せよ」というものであった。持ち込みが許されたのは「ナチス・ドキュメント」一冊。本の中から事実を取りだし、自分自身の考えを論証するのが生徒に与えられた課題である。正直言って、当時の私にはお手上げだった。

ドイツ語をはじめ、歴史、社会学、経済学などは、ドイツ語の授業で学んだ「テキストの分析と解釈、批判」(米国ではクリティカル・リーディング)の手法でアプローチし、ドイツ語の授業で学んだ手法で作文を書く。どの授業でも暗記や知識の詰め込みはさほど重視されず、重要なのは自分の考えだった。課題を分析し、多角的に批判的検討を加えて自分自身の考えを導き出したら、それを支える根拠を並べて論証する。大変な作業である。高度な論理的思考力と分析力、解釈力、論証力、検証力、批判力、記述力などが求められるからである。詰め込み教育の中で育った日本人の高校生は、どんなに学力優秀でも、ドイツ人教師が満足できる論文を書ける生徒は恐らくほとんどいないであろう。

確かに独ソ不可侵条約は授業で扱われた。教師と私以外の生徒たちが熱い議論を戦わせていた。その内容は私も覚えていたので、私はそれを書いた。結果は落第ぎりぎりの評価だった。つまり「授業に参加していたのは認めるが、自分自身の考えがない」という評

母語教育がすべての教科の基礎になっていることを確認し、そのシステムの合理性に嘆息した。日本の母語教育とはいったい何なのであろうか。我々は「国語」でいったい何を学んだのであろうか。